

鹿角市文化財調査資料 14

# 新斗米館跡

鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書

1980-3

秋田県鹿角市教育委員会

# 新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書 正誤表

1ページ 第1図 新斗米館周辺地形図



第1図 新斗米館周辺地形図 五万分の一

		誤	正
9ページ	第6図	<del>第3号住居跡</del>	<del>第2号野穴遺構</del>
	中央	炭火物	炭化物
	中央	炭火材	炭化材
10ページ	21行	金属製品炭化物	金属製品, 炭化物
15ページ	1行	4炭火物	4炭化物
	2行	炭火材	炭化材

# 目 次

## 序

## 例 言

I 遺跡の位置と環境 .....	1
II 発掘調査の概要 .....	2
1. 発掘調査にいたる経過 .....	2
2. 発掘調査の方法 .....	4
3. 調査経過 .....	4
III 検出遺構 .....	5
IV 出土遺物 .....	10
1. 土 器 .....	10
2. 石 製 品 .....	12
3. 金 属 製 品 .....	12
4. 炭 化 物 .....	15
V 新斗米館について .....	15
VI ま と め .....	16

## 挿図目次

第1図	新斗米館周辺地形図	1
2	遺跡地形図	2
3	遺構配置図	3
4	第1号住居跡, 第2号住居跡	6
5	第1号竪穴遺構	7
6	第3号住居跡, 第2号竪穴遺構	9
7	大溝状遺構, 小溝状遺構	11
8	土器, 石器実測図	13
9	金属製品実測図	14

## 図版目次

図版1	新斗米館遠景	17
	作業風景	17
図版2	第1号住居跡全景	18
	第2号住居跡全景	18
	第1号竪穴遺構全景	18
図版3	第3号住居跡全景	19
	第2号竪穴遺構全景	19
図版4	大溝状遺構全景	20
	。 分水施設	20
	古銭出土状況	20
図版5	鉄製品出土状況	21
図版6	遺物出土状況	22
図版7	炭化物出土状況	23
図版8	出土遺物	24

## 序

新斗米館は、その昔、新斗米佐近の居館であったところといわれ、中世以降の鹿角四十二館の一つに数えられています。

この館において、昭和54年2月末に土取工事がなされ、3月になって断面部に竪穴遺構が発見された旨報告があったので、ただちに工事中止を要請し、文化財保護法に基づく届出を指導しました。

現在、中世の館跡が全国的関心を高めてきていますし、鹿角市では開発事業の拡大とともに、館跡が絶好の土取場となっていることから、その消滅が急速に進む状況にあり、このことから、館の調査、発掘記録が緊急となりつつあります。

そこで6月になってから鹿角市で発掘調査を決定し、8月になって、実施したのであります。

中世以降の館跡調査については、昭和30年の小枝指館（七ッ館）の調査の事例がありますが、今回の調査は、それに次ぐものであり、貴重な資料を確保できたと思われます。

最後になりましたが、調査の担当者をお引受けくださった伊藤穂秋氏をはじめ、関係した多くの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和55年3月

秋田県鹿角市教育委員会教育長

柳 沢 源 一

## Ⅱ．発掘調査の概要

### 1. 発掘調査にいたる経過

新斗米館跡の頂部は、現在畑地として利用されているが、南端部の斜面は、かなり険しく自動車も登れない状態であったことから、土地所有者は地盤を下げて、耕作を容易にするとともに、あわせて畑地面積の拡大を図ろうということになり知り合いの土産業者に土取りを依頼し、昭和54年2月末に着手したという。

3月に入って、たまたま、館跡を通りかかった市立花輪小学校長安村二郎氏がこれを発見した。しかも削土された台地の断面に、表土の黒土が落ち込んだ遺構様のものを数ヶ所にわたって確認できたので、ただちに届出をしなければならぬ旨を説明し、工事の中止を依頼し、市教育委員会へ連絡があった。

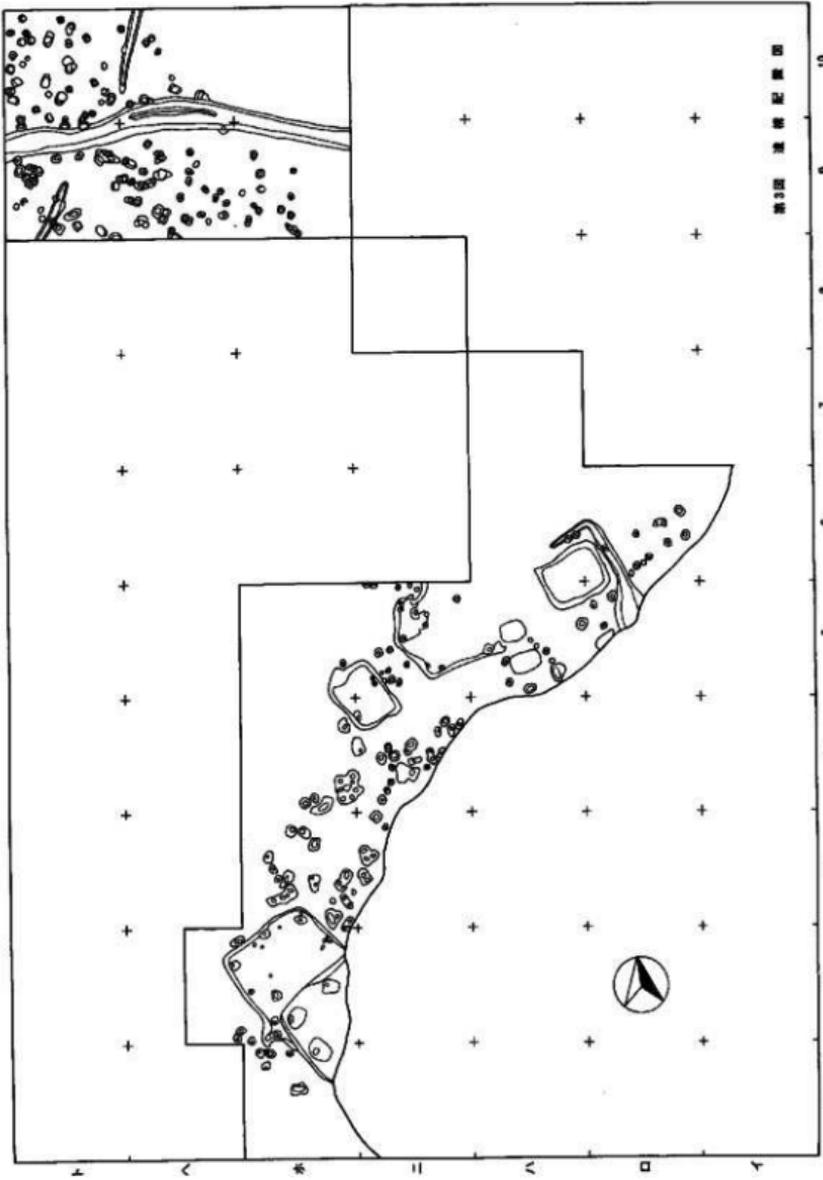
そこで、教育委員会では、土地の所有者を呼んで事情を聞き、初めてそのいきさつを知ったのである。いま館跡が遺跡としての重要性の認識を深めている時であり、鹿角市においても中世の館の一つである新斗米館が未調査のまま取り壊されることは許されないものであることを説明し、文化財保護法に基づいて届出を指導したのである。

6月に入って、文化庁から「事前調査をすべし」との指導があったが、個人では調査のめどがたらず、市教育委員会に再三にわたって善処方の申し入れがあったことから、館跡調査の重要性をふまえて、市教育委員会として発掘調査の実施にふみきったのである。

しかし、すぐには調査員の確保ができず、調査は、昭和54年8月2日から13日までの13日間にわたっておこなわれたのである。



第2図 遺跡地形図



## 2. 発掘調査の方法

前述したように、畑地であった所が削土のために頂部は荒れており、削土された崖面には遺構が数ヶ所露出しており、そこを中心に精査して遺構を確認することにした。

グリッドの設定は、地形を考慮し、磁北から東に14度傾斜した線を基準線とし、4 m四方を1単位とした。さらに南北方向（南から北へ）を算用数字で、東西方向（東から西へ）をカナ文字とし、算用数字とカナ文字の組み合わせで各々のグリッドを呼ぶことにした。グリッドを設定したのは、864 m<sup>2</sup>で調査の対象となったのは 300m<sup>2</sup>であった。

## 3. 調査経過

調査は、削土によって崖面に落ち込みが表われている遺構を中心に上面にグリッドを設定し精査していくようにした。

- 8月2日 上面の草刈りを行ない、4 m×4 mのグリッドを設定した。
- 8月3日～5日 表土の除去作業及び遺構の検出作業
- 8月6日～8日 遺構の検出作業と検出遺構の精査
- 8月9日 遺構の断面図の作成 粟文化課 岩見氏来跡
- 8月10日 遺構の精査と断面図の作成 鹿角市社会科研究会員 来跡
- 8月11日～12日 遺跡の平板測量（S＝Ⅵ）
- 8月13日 午前調査終了

### Ⅲ. 検出遺構

遺構は、除草後表土を取り除き、地山の黄褐色土火山灰層を精査して確認した。調査した遺構は崖面に表われている南側から順に述べていくことにする。

#### 第1号住居跡（第4図）

（遺構の位置） ホの1・2のグリッドにある。

（平面形、方向） 平面形は方形を呈するが、東側と南側のコーナーは削土によって不明である。1辺が3mを越えるものである。

（堆積土） 暗褐色土が充填しており、小粘土塊が混入している。

（壁、床面） 確認面からの壁高は、西側で80cmほどあり、北側は第2号住居跡を切断しており、81cmである。床面は平坦である。

（柱穴） P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>までの3個が確認されたが、東側が削土により全容は不明であるが、壁より柱穴の中央まで15～40cm離れており、床面からの掘り込み方も浅く15～20cmである。

#### 第2号住居跡（第4図）

（遺構の位置） ホの2・3、ヘの2のグリッドにあり、第1号住居跡と重複している。

（平面形、方向） 平面形は方形を呈しており、1辺が3m70cmであるが、南側が第1号住居跡によって切れ、壁面は不明である。南西のコーナー部分がやや張りだしている。

（堆積土） 暗褐色土が充填しており、1号跡と同じ小粘土塊が混入している。

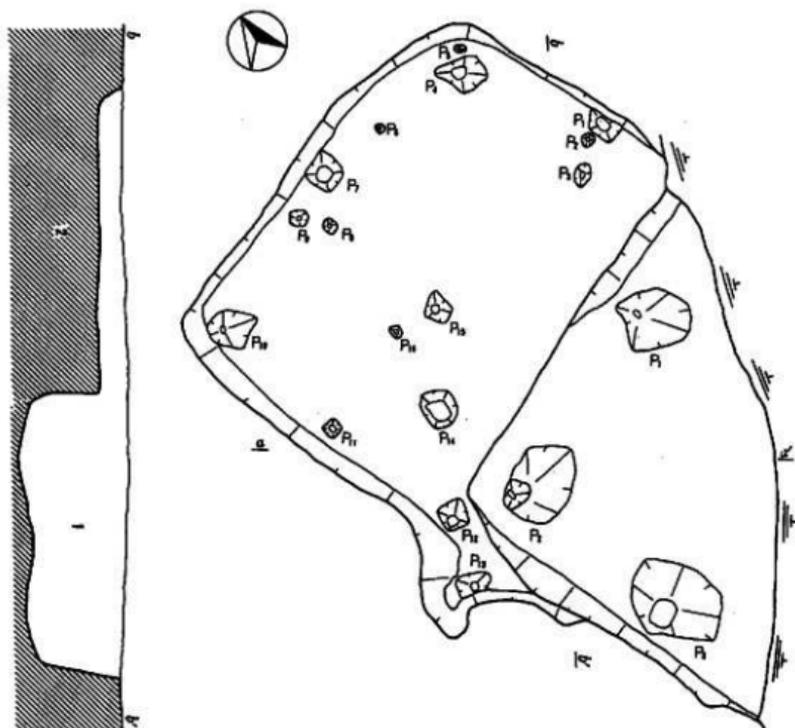
（壁、床面） 確認面からの壁高は、北側で20cm、東側で25cmであり、床面は平坦であるが、南側にやや傾斜する。

（柱穴） 住居跡内には柱穴が16個検出されたが、壁より柱穴の中央まで10～20cm離れており、対応するようにある柱穴が主柱になるとと思われる。柱穴の深さは床面からで下の表ようになる。

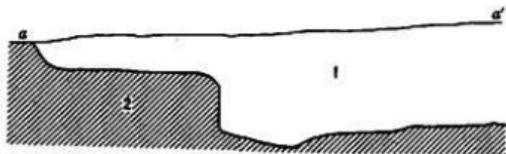
表1 第2号住居跡内ビット一覧表（床面からの深さ）

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
深さ (cm)	20	60	63	34	36	47	30	30	20	57	36	50	34	13	35	36

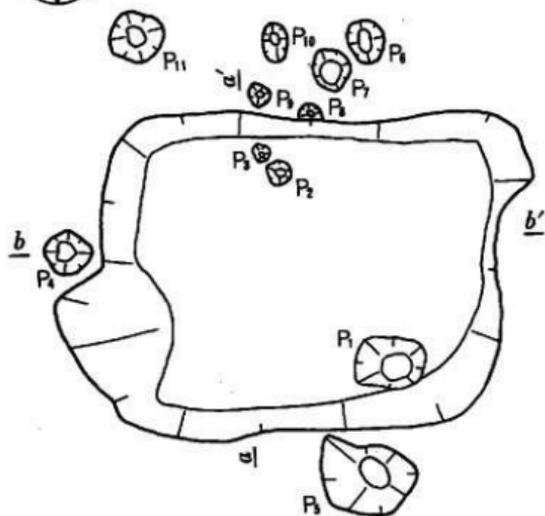
（出土遺物） 住居跡内からの出土遺物は鉄器1点である。



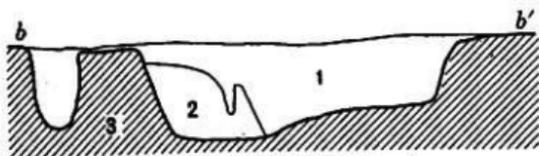
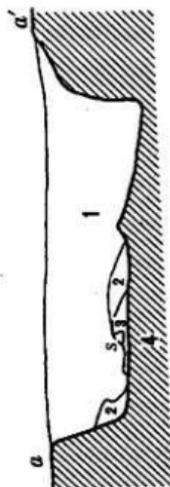
- 1 暗褐色粘土ブロック遺入層  
2 地山



第4図 第1号住居跡・第2号住居跡



- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 地山



- 1 暗褐色土
- 2 褐色粘土まじり土
- 3 地山



第5図 第1号竖穴遺構

### 第1号竪穴遺構 (第5図)

〈遺構の位置〉 ニ・ホの4・5グリッドにあり、第2号住居跡の北7mにある。

〈平面形、方向〉 隅丸長方形を呈しており、長軸は2m56cm、短軸1m80cmある。長軸は南北方向にある。

〈堆積土〉 一面に暗褐色土が、床面に黒褐色土と黄褐色土が堆積し、北壁には褐色粘土混じり土がある。

〈壁、床面〉 確認面から50cm程の落ち込みであり、床面は北東側に傾斜している。

〈柱穴〉 柱穴は、遺構内に3個、遺構外に8個検出されたが、対応する形での存在は認められなかった。一応この遺構に関連するものとして下の表に深さを記述する。

表2 第1号竪穴遺構のピット一覧 (床面からの深さ)

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
深さ (cm)	10	18	18	18	55	18	8	6	5	10	40

〈出土遺物〉 竪穴遺構内から、古銭2枚が出土している。

### 第3号住居跡 (第6図)

〈遺構の位置〉 ハ・ニの5グリッドにある。第1号竪穴遺構の東側1m20cmにある。

〈平面形、方向〉 平面形は、調査の関係から北側を確認することができず西側と南側の壁を確認したが、東側は壁の存在がはっきりしないため不明である。推定ではあるが東西の長さが4m50cmと考えられる。

〈堆積土〉 上面を黒褐色土が覆い、床面は暗褐色粘土ブロック混入が充填し、一部には黒色土が堆積している。

〈壁、床面〉 壁高は40~45cmである。壁の立ち上りはほぼ垂直で、西壁や南壁の一部には焼けた痕跡が認められる。西側には焼土の堆積している所もあり、床面はやや平坦で、木炭片が散乱している。中央部分の木炭片には茅が認められる。北側のグリッド断面には藪がらと思われる炭化物が検出された。

〈柱穴〉 住居跡内には14個の柱穴があり、壁際にあるものと離れているものがある。柱穴の深さは下の表に示す通りである。

表3 3号住居跡内ピット一覧表 (床面からの深さ)

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
深さ (cm)	10	10	10	20	12	10	45	33	37	10	19	20	20	23

### 第2号竪穴遺構

〈遺構の位置〉 ロ・ハの5・6の北側にある。

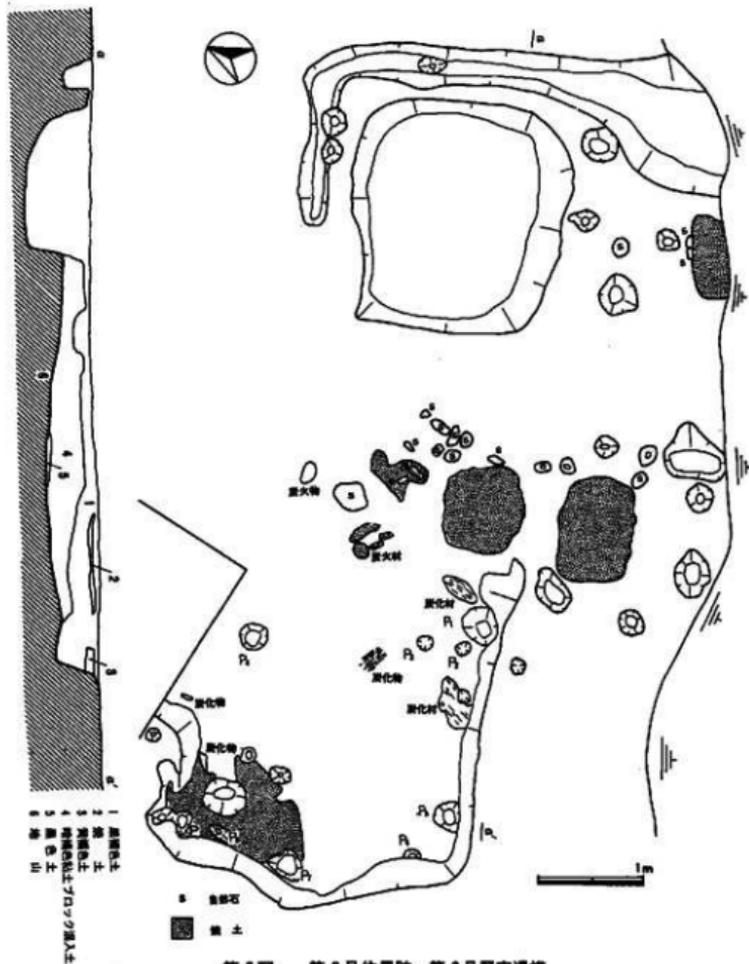
〈平面形、方向〉 長方形であり、長軸は東西で2m25cm、短軸は1m90cmである。

〈堆積土〉 黒褐色土が充填している。

〈壁、床面〉 壁高は80cmある。床面は平坦でやや西側に傾斜する。

〈柱穴〉 遺構内には認められず、外に数個検出されたが、この遺構に関連あるものかどうかははっきりしない。

この遺構東20cmには南北に流れる溝状遺構が認められた。北は幅20cm、南は削土によって切られているが、幅1m30cmある。溝の中に柱穴が1個検出され、その深さは65cmである。



第6図 第3号住居跡、第2号竪穴遺構

住居跡、竪穴遺構外の柱穴群についてみると、深いもので74cm、浅いもので20cmある。それぞれの柱穴に規則性は認められない。南側の削土前であれば、掘立柱建物跡が検出されたとも考えられる。

#### 大溝状遺構（第7図）

〈遺構の位置〉 ホートの9・10のグリッド境にある。

〈堆積土〉 暗褐色土が充填しており、溝の底面に黒褐色木炭混入層がある。

〈溝の構造〉 溝は、西から東に流れるように、底がやや傾斜しており、西の幅は確認面で1m、底が45cmあり、ゆるやかに曲がり、東の幅は確認面で65cm、底が45cmである。溝の中央部分に長さ2m90cm幅が最大で25cm、高さ60cmの分水の施設が検出された。溝の深さは65cmである。

〈出土遺物〉 溝の埋土中から古銭が4枚検出された。

#### 小溝状遺構

〈遺構の位置〉 への10のグリッドにある。トの9の中央に位置するものもある。

〈堆積土〉 暗褐色土が充填している。

〈溝の構造〉 への10にある溝は南から北に流れ、深さ50cm、確認面の幅30cm、底の幅が20cmである。トの9の溝は、北から南へ傾斜しており、深さ20cm、確認面の幅25cm、底の幅15cmである。

#### 柱穴群

ホートの9・10グリッドの大溝状遺構をはさんで南と北に柱穴が多くみられるが、掘り込みかたには楕円形のものと同方形のものが検出された。柱穴には、掘立柱建物としての規則性を認めるのが困難であった。楕円形の掘りこみのものが方形より古いと思われる。

## Ⅳ. 出土遺物

遺物として、土器類、石製品、金属製品炭化物がある。

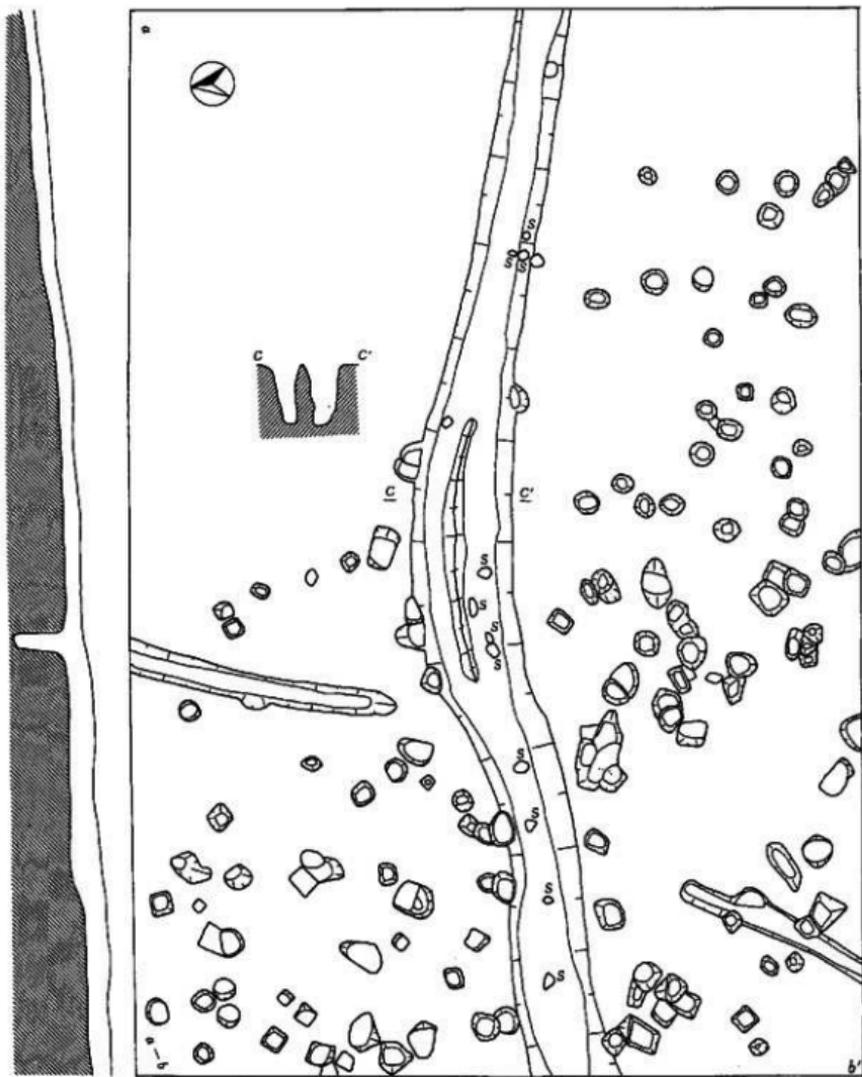
### 1. 土器

土器類としては、縄文土器、青磁、緑釉陶器、中世陶器、染付が出土している。

縄文土器（第8図1～3 図版8の1～7）

1と3は、撚糸を回転によって施文したものであり、2は、撚糸による羽状文である。4から7までは無文である。

中世陶器はいわゆる須恵器系中世陶器で、整形技法は珠洲古窯跡出土のものに類似する甕（図版8の15）の破片である。10・11は越前焼の碗と考えられる破片であり、8・9・12は青磁の破片である。16は、緑釉陶器は高台付の碗の破片で、高台の高さ0.5cm、径5.4cmである。13・14は染付の



- 1 埋藏土
- 2 埋藏土内瓦片
- 3 地山



第7图 大溝状遺構，小溝状遺構

底の破片である。

## 2. 石製品 (第8図17~23)

石製品としては、砥石、石皿、墨入れよう小皿がある。

砥石は、5点出土している。大きさ、使用面、石質など下の表のとおりである。

表4 砥石一覽 (第8図18~22)

No.	現存長 (cm)	厚さ (cm)	使用面の数	石質	備考
18	9.1	3.5	4	流紋岩	焼けている。携帯用
19	7.1	0.6	2	玄武岩	小破片である。
20	8.0	6.4	2	玄武岩	破片
21	19.8	8.5	3	流紋岩	焼けて赤褐色を呈する。
22	6.9	4.5	5	流紋岩	焼けている。分銅形を呈する

23は、石皿の小破片と思われる。

17は、墨入れよう小皿と思われる破片で推定口径4.6cm、内径3.0cm、高さ2.3cmの丸底のもので、自然石を利用している。

## 3. 金属製品

鉄鎌 (第9図24) は第3号住居跡近くの出土で、全長16cm、身幅は中央で2.9cm、切先は大きく曲り半月状を呈する。身の厚さは鎌で0.35cmで、刃は0.1cmあり、柄に近い部分が折れ曲っている。27も鎌と考えられるが先端部は不明である。現存長は9.6cm、身幅は中央で2.4cm、身の厚さは鎌で0.3cm、刃先に向かってやや厚さを増すが、刃先は0.25cmある。木部にはめ込む臺の部分は長さは1.6cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmある。

刀子 (第9図25) は第2号住居跡埋土中から出土したものである。全長17.7cm、身幅は2.6cm、身の厚さは鎌で0.4cm、刃先は0.2cmあり、身は切先に向い、わずかにそりを有する。

26、28は用途不明の鉄製品で、26は、長さ10.7cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm、28は、長さ6.2cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmある。

30は、鉄管である。長さ3cm、外径1.7cm、内径0.9cm、厚さ0.3cmである。巻き込んで接続した痕跡が認められる。

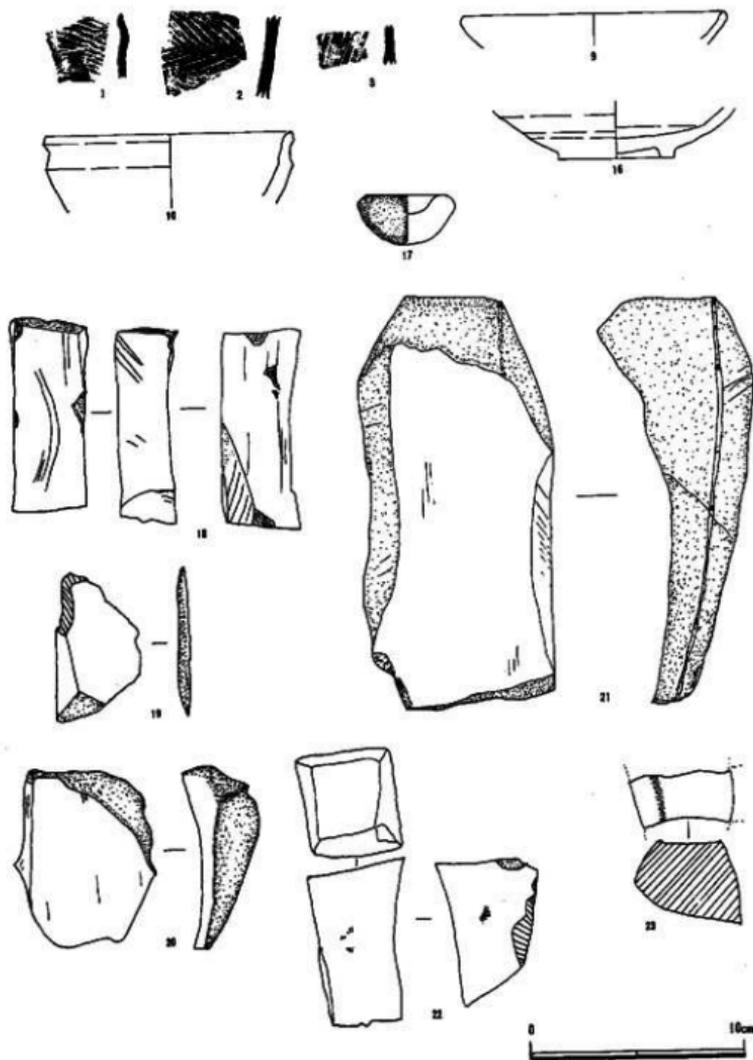
鉄釘 (第9図29) 長さ7.3cmで、断面形は方形であり、先端に向い、漸次、細くなり、頭部は張り出している。

銅製袂身具 (第9図31) は第3号住居跡埋土中から出土したものである。外径1.3cm、内径1.1cm、幅0.2cm、厚さ0.08cmある。

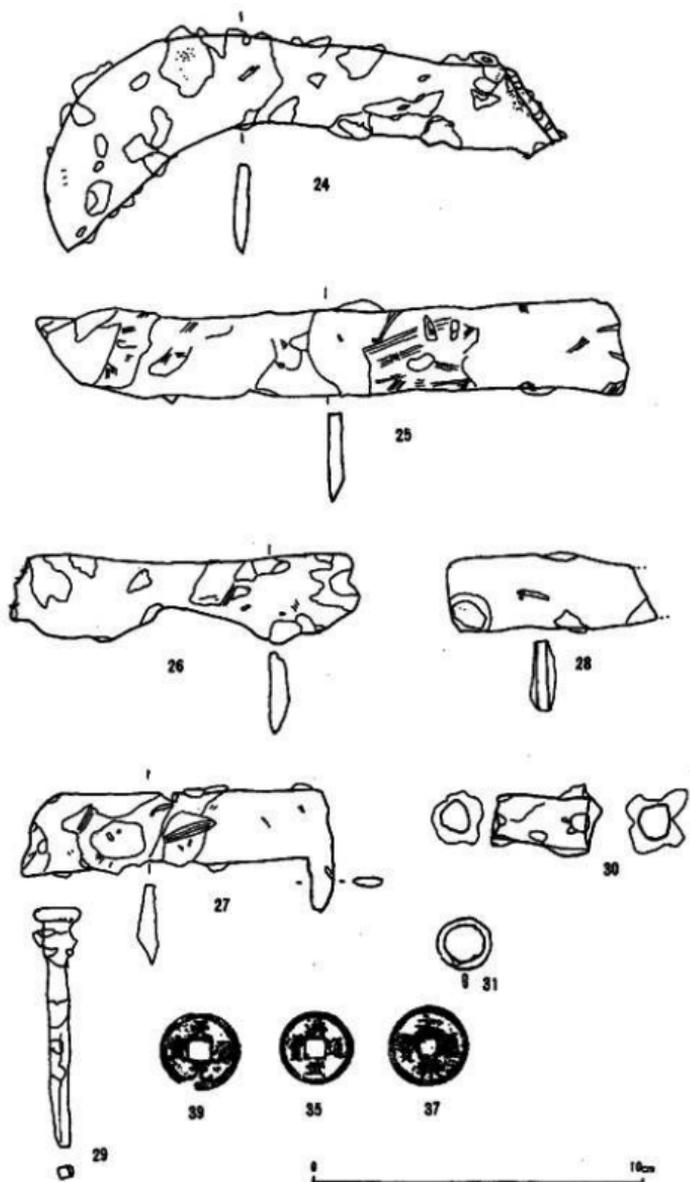
### 銅銭 (図版8の32~39)

検出された銅銭は8枚である。錆化が著しいものが多いが、貨幣の判読できるものとして「洪武通寶」「永楽通寶」「天元口寶」がある。直径は2.4cm、方孔一辺が0.6cmと0.79cmを測り、小ぶ

りな銅銭である。



第8圖 土器、石製品



第9圖 金屬製品

#### 4. 炭火物

第3号住居跡及びその付近から炭火材、炭化物が出土した。これらの炭化物の鑑定を鹿角市農業研究所に依頼したところ、次のような解答があった。

##### 新斗米館跡の出土炭化物について

鹿角市農業研究所長 岩松 清四郎

昭和54年度新斗米館跡発掘調査にもなって出土した炭化物2件の鑑定結果は、下記の通りである。

1. 第3号住居跡出土の炭化物は、使用材の杉材、屋根の茅あるいは扱入れの俵に使用した藁また同俵に入っていたと推定される扱殻である。  
尚、玄米の炭化物は確認できなかったが、扱より推定すれば日本型のイネと思われる。
2. ハの5グリッド、Ⅲ層出土の炭化物中に確認できたものは、円形小粒の粟と不整形であるやや小粒の稗である。稗の確認が多く、粟はやや少ない。また大豆もあると言われていたが確認はできなかった。

## V. 新斗米館について

鹿角四十二館の内の一つである新斗米館は、新斗米部落の北側にある平城である。東西二郭より成る屋敷型のものである。本館の由来は明らかでないが、延亨五年写本の鹿角由来集（注1）によれば

「新斗米村、新斗米左近領名字奈良居館有り」

と記されている。

この館の近くには、小平館、小枝指館、高市館が1km未満の距離内にあり、同族の結合により館の防衛を期待することができる。西郭が本郭で、東西100m南北70mの広さを有し、車郭は東西約60m、南北約70mの広さを有し、四周は濠が掘られている。郭内に館神として八幡神社がある。

（注2）

注1 「鹿角由来集」古文書解説会テキスト 安村二郎作成

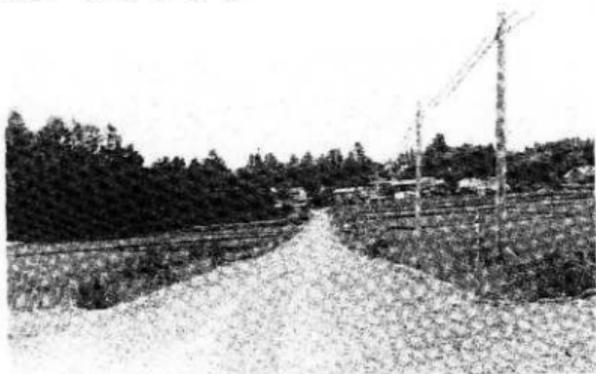
注2 みちのく双書第32集「南部藩域の研究」青森県文化財保護協会 昭和51年

## Ⅵ. ま と め

- (1) 第1号住居跡と第2号住居跡についての時期差は、第2号住居跡の南側の壁を第1号住居跡が立ち切って構築されていることから第2号住居跡が古いことが判明した。
- (2) 第3号住居跡と第2号竪穴遺構については時期差を決めるものが不明である。住居跡の床面からは、多くの焼土、木炭、炭化物が検出されたことから、火災にあったことがうかがえる。
- (3) 竪穴遺構については、使用目的は現状では不明である。
- (4) 柱穴群については、独立柱建物を考えて精査したが確認できず、欄干か、独立柱建物かは今後の調査結果による。
- (5) 溝状遺構は、館跡内でどのような位置にあるのか、建物との関係はどうなっているか今後の調査によって確かめていく必要がある。
- (6) 遺跡の年代は、出土遺物によると縄文時代から続くと考えられるが多くの期待をかけられない。銅銭銘、鹿角由来記、鹿角由来集などから考えて、多く活用された時期は中世から近世にかけての館としての機能をしたころと考える。

### 参 考 文 献

- (1) 大館市史編さん委員会「大館市片山館コ発掘調査報告書」第2次 1974年3月
- (2) 鹿角市教育委員会 「小平遺跡発掘調査報告」 1979年3月
- (3) 横手市教育委員会 「金沢遺跡発掘調査概報」 1967年3月
- (4) 北上市教育委員会 「鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ」1975年3月
- (5) 江上波夫「館址」東京大学 1958年
- (6) 秋田県立博物館「秋田県立博物館研究報告」第3号 1978年
- (7) 秋田県教育委員会 日本道路公団  
「湯瀬館発掘調査現地説明会資料」 1979年8月



遺跡遺景



削土により崖面に  
認められる遺構



発掘作業風景

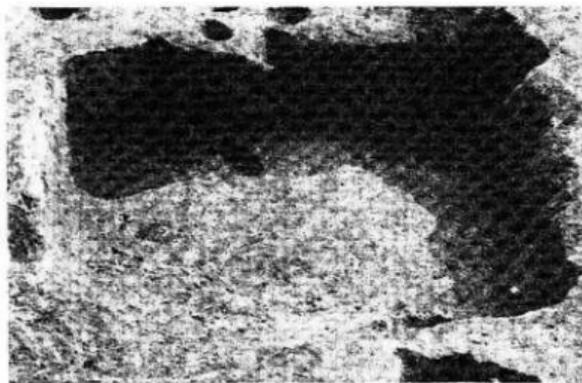
图版 2 第 1, 2号住居跡, 第 1号竪穴遺構



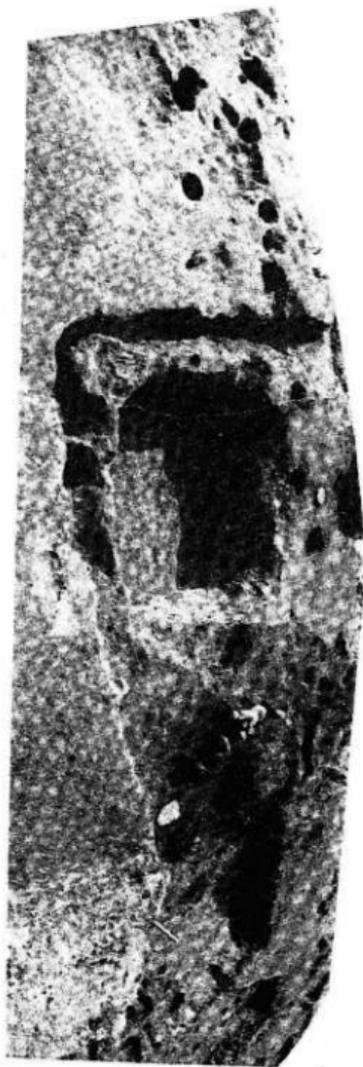
第 1号住居跡, 第 2号住居跡(上,右)



第 1号竪穴遺構(下)



图版 3 第 3 号住居跡，第 2 号竖穴造構



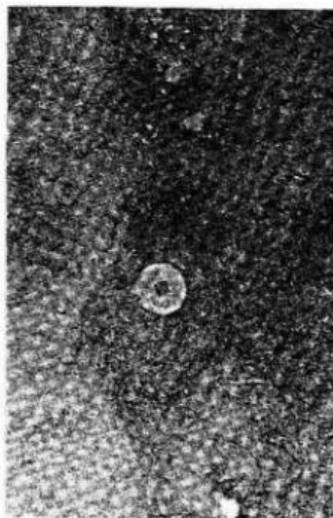
圖版 4 溝狀遺構，古錢出土狀況

大溝狀遺構



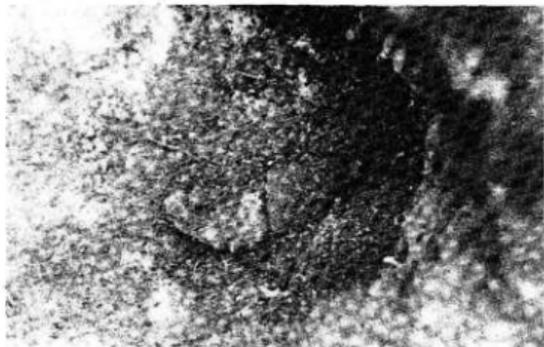
分水施設

古錢出土狀況



图版5 铁製品出土状况

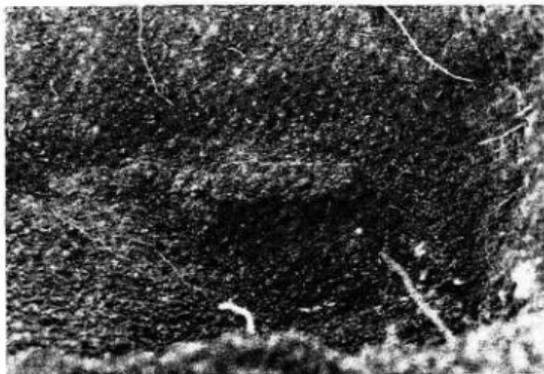
铁鍬出土状况



刀子出土状况



铁製品出土状况

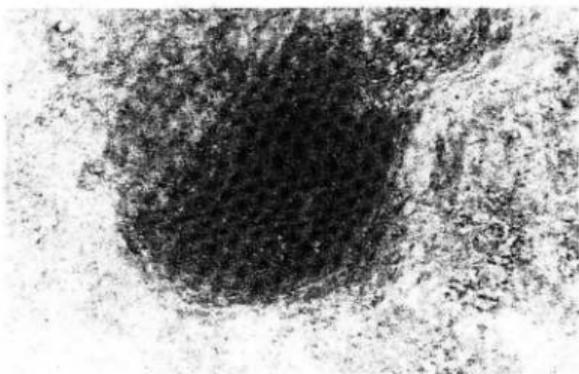


图版6 遺物出土状況

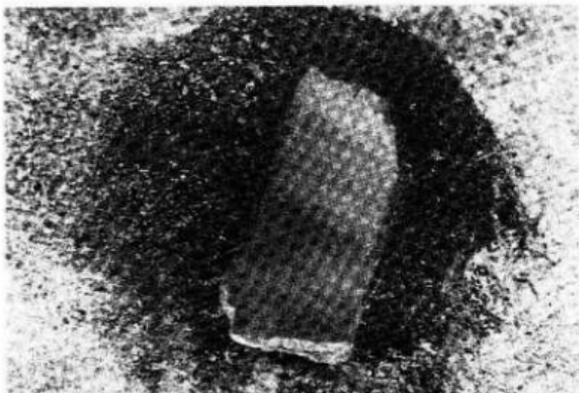
土器出土状況



砥石出土状況

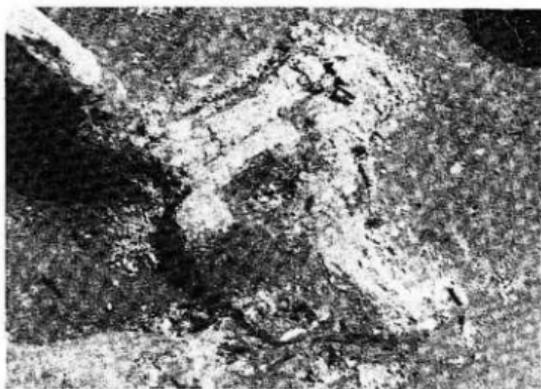


砥石出土状況

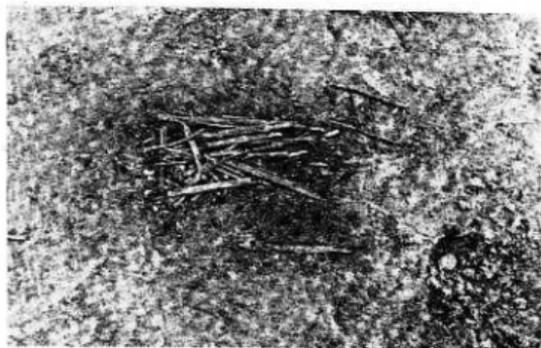


図版7 炭化物出土状況

炭化材出土状況



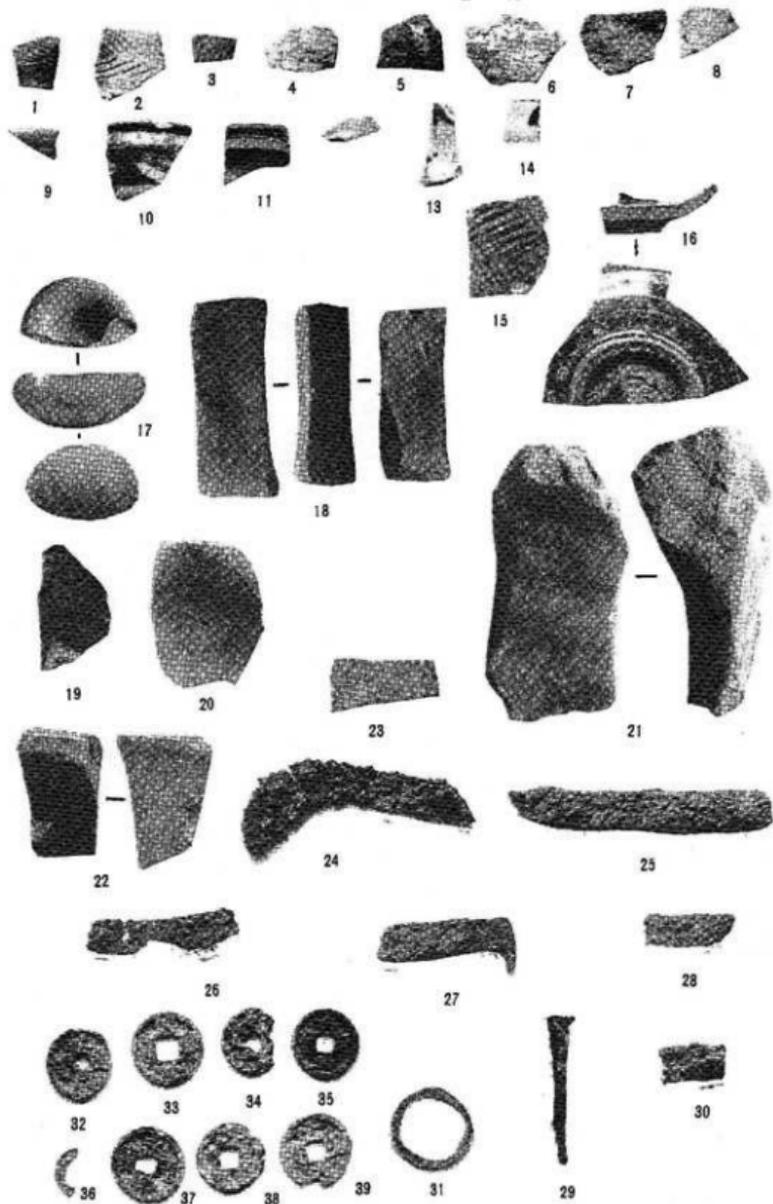
茅の炭化物出土状況



炭化物出土状況



圖版 8 出 土 遺 物



---

鹿角市文化財調査資料 14

## 新斗米館跡

—鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書—

発行年月日 昭和55年3月31日

発行所 鹿角市教育委員会

〒018-53

秋田県鹿角市十和田毛馬内字上陣場19の5

TEL 01863-5-4011

印刷所 大鐘孔版社